

研究課題	アカデミック・ライティング教材開発に向けた適切な引用を促すための基礎的研究
研究代表者	近藤裕子 (教育開発推進センター 任期制専任講師)

## 1. 研究目的

レポートや論文などのアカデミック・ライティングにおいて、分野を問わず「引用」は欠かせない。近年はインターネットの普及により、以前よりも引用が容易にできるようになり、レポートや論文などで盗用や剽窃が疑われるような不適切な引用が増えている。そのため、アカデミック・ライティングにおける引用方法の徹底はとりわけ重要な課題とされ、その指導は特に力を入れて行われるようになってきている。しかし、これまでの指導では、剽窃防止のための注意喚起などの倫理教育や正しい引用形式・方法の解説についてのものが中心であった。そして、それだけでは問題解決には至らず、不適切な引用はまだ多く見られる。したがって、より効果的に引用を指導するための方法および教材の開発が急務である。

教材開発にあたり、どのように引用を捉え、学習者に指導すれば、正しい引用につなげられるかを整理しておく必要がある。アカデミック・ライティングにおける引用について、二通(2007)は「原文の内容や筆者の意図などを正確に理解したうえで、論文の目的に合わせて引用部分を選択し、引用方法や形式、表現などを使い分けながら自分の文章に取り込んでいくという、読解から文章表現にいたる複雑な操作が必要になる」と、外からの情報を取り込む際の段階の複雑さと難しさを指摘している。ここで指摘されているように、引用を行うために踏まなければならないステップは多く、学習者の不適切な引用例も、文章構造に関わるものから表現・形式に至るまでさまざまな段階に見られる。しかし、学習者の産出物から不適切な引用例を類型化したものはなく、どのような観点からの指導が必要かはその時々に応じて現場の教師に委ねられているのが現状である。

先行研究を見てみると、これまでは矢野(2014)のように、引用の標識表現や形式から引用の妥当性や課題を論じたものが多く見られた。一方で、引用と解釈による論理展開構造に注目した研究も行われている(山本・二通 2005)。また、テーマ選定や推敲などライティングのプロセス全体に関する研究もある(大島 2007)が、そのプロセスのどの段階でどのような引用が行われているかという引用との関係は示されていない。以上のように、ある観点から引用を捉えようとしたものはいくつかあるが、実際に引用を行う際に、どのような点から引用を考え、行えばよいかを俯瞰的に示したものはなく、アカデミック・ライティングにおける引用の全体像はまだ明らかになっていないとはいえない。

そこで、本研究では、これまでの研究とは異なる観点から、特に大学初年次の日本人学生、留学生のレポート・小論文などで産出された不適切・不十分な引用を分類し、分析を行うことで、学習者が不適切・不十分な引用を行う原因を究明することを目的とする。学習者の誤用を分析することにより、これまで教師にも見えていなかった新しい引用の側面の発見が期待でき、そこを出発点とした引用の教材開発につなげることを将来的に目指す。

## 2. 研究方法

### (1) 調査対象

大学初年次の学習者（日本人・留学生）の書いた 2000 字～4000 字のレポートを対象とした。対象となったレポートは、日本人学生延べ 240 名分、留学生延べ 70 名分である。

### (2) 調査・分析方法

研究代表者・分担者および協力者の 3 名（日本語教育歴 20 年以上）で、学生のレポートを、①内容・引用ともに優れているもの、②内容は適切だが、引用が不適切・不十分だと思われるもの、③引用以外にも全体の構成や内容等に問題があるものの、3 種類に分けた。その上で 3 人の意見が一致した②について、さらに不適切だと思われる引用、不十分な引用について、それぞれ分析を行いながら書き出した。その後、それまで挙がった不適切さの諸相を分類した。

### (3) 倫理的配慮

本研究は、学生個人のレポートを利用して行うものである。大正大学の倫理規定に則り、予め学生に研究や教材開発のために使用する可能性があることを断り、使用する際は、その名前部分を破棄し、個人情報も一切明らかにしていない。また名前や個人を特定されうる情報が書かれたものは使用しないことを徹底して行った。

## 3. 研究成果と公表

### (1) 研究成果と今後の課題

本研究により、アカデミック・ライティングにおける学生の課題および指導上の課題の一端を明らかにすることができた。分析結果の詳細については、(2)の②④⑥のほか、今後公開予定の各論文を参照していただきたい。まず学生の産物物に見られる誤用を分析し、引用指導の方向性を考える要素を次のように分類した。①引用の必要性、②引用するデータが一次情報で信頼できるかなどのデータの質、③直接引用か間接引用かという適切な引用形態、④引用元の内容を正確にまとめ、文脈や論の展開に関連づけているかという要約の問題、⑤どこからどこまでが引用か、引用元が何か分かるかという引用形式、⑥全体に対するバランスがよく、不要な情報が入っていないかという量の問題、⑦引用したデータに語らせていないか、データの理解は正しいかという解釈の問題、以上 7 つの要素が抽出できた。これらの 7 つの要素が、全体の構成、論の展開、引用の目的に合うように整えられれば、説得力のある文章展開になり、内容・引用ともに優れていると判定されるのだと言える。

この研究の成果により、これまでの教材をどのように分析するかという着眼点が見えた。その結果、既存の教材でカバーされているものとそうでないものを分析し、上の 7 つの要素すべてを網羅した教材がないことがわかった。その上で、今後は、これら 7 つの要素をどのように教材化に結びつけるかを探っていきたい。

## (2) 公表

研究成果の一部は、以下の学会・研究会で公表した。また、⑤第48回日本語教育方法研究会においては、「第9回日本語教育方法研究会奨励賞」を受賞した。

- ① バリ日本語教育国際研究大会ポスター発表「アカデミックライティングにおける不適切な引用文の分析と課題」(於インドネシア・バリ, 2016年9月10日)
- ② 「アカデミックライティングにおける不適切な引用文の分析と課題」『2016年日本語教育国際研究大会予稿集』(電子版)
- ③ 第47回日本語教育方法研究会 口頭発表・ポスター発表「アカデミック・ライティングにおける引用指導の課題」(於日本学生支援機構東京日本語教育センター, 2016年9月24日)
- ④ 「アカデミック・ライティングにおける引用指導の課題」『日本語教育方法研究会誌』23(1), pp.8-9
- ⑤ 第48回日本語教育方法研究会 口頭発表・ポスター発表「大学初年次のレポート作成指導で引用をどう扱うか」(於宮城教育大学, 2017年3月18日)
- ⑥ 「大学初年次のレポート作成指導で引用をどう扱うか」『日本語教育方法研究会誌』23(2), pp.8-9

今後、引き続き研究を進めながら、学会・研究会での発表を行う。その成果をいくつかの論文にまとめ、複数の学術誌(「専門日本語教育研究」・「日本語教育方法研究会誌」等)に投稿する予定である。

## 4. 文献

- 石黒圭(2011)「第VI章 8 引用の種類と作法」中村明他編『日本語文章・文体・表現事典』朝倉書店
- 市古みどり(編著)(2014)『アカデミック・スキルズ資料検索入門—レポート・論文を書くために—』慶應義塾大学出版会
- 大島弥生(2007)「大学初年次のレポート作成授業におけるライティングのプロセス」『言語文化と日本語教育』33号, pp57-64
- 佐渡島紗織・吉野亜矢子(2008)『これから研究を書くひとのためのガイドブック』ひつじ書房
- 二通信子(2007)「外からの情報を自分の文章にどう組み込んでいくか—アカデミック・ライティングにおける引用の学習—」『2007年度日本語教育学会春季大会予稿集』pp.283-284
- 文化庁「著作権なるほど質問箱」<http://chosakuken.bunka.go.jp/naruhodo/> (2016.8.17 閲覧)
- 矢野和歌子(2014)「学部留学生の論説文における引用の課題」『アカデミック・ジャパニーズ・ジャーナル』6, pp94-101
- 山本富美子・二通信子(2015)「論文引用・解釈構造—人文・社会科学系論文指導のための基礎的研究」『日本語教育』165号, pp. 94-108
- 山本富美子(2016)「論文の「意図的ではない剽窃」の問題」『Global communication』6, pp. 117-132